【2】アッタカターなどに見られる阿難以外の侍者伝承

［0］アッタカター中に散見される記述によれば、釈尊の成道後初期（成道後 20 年間）においては、釈尊に定まった侍者比丘がおらず、ナーガサマーラ（Nāgasamāla）、ナーギタ（Nāgita）、ウパヴァーナ（Upavāna）、スナッカッタ（Sunakkhatta）、チュンダ沙彌（Cunda samaṇuddesa）、サーガタ（Sāgata）、ラーダ（Rādha）、メーギヤ（Meghiya）という諸比丘が、釈尊に付き従って釈尊の鉢と衣を運んだという。そしていくつかの記述によればそういった侍者比丘の一部に無作法があったことから (1)、一人の定まった侍者が選ばれることになり、それが阿難であったという。ただし挙がる侍者の名は文献によって多少の出入りがある。アッタカターに限れば阿難を除いて侍者の総数は 7 人とするものが多く、一つだけ 8 人になるものがある。４人を挙げるものもあるが、これはすべてを挙げる意図を欠いたものであろう。

また『大智度論』などの北伝の漢訳資料にも阿難以外の侍者が言及される。これらの漢訳資料の侍者たちとアッタカターの侍者たちは一部が一致しているから、この阿難以外の侍者についての伝承は、南伝と北伝とで無関係に成立したものではないことが伺える。おそらくこれらの侍者伝承も大元をただせば、その根拠を原始仏教聖典に有するものと考えてよいであろう。なお漢訳資料でも『善見律毘婆沙』の記事は *Samantapāsādikā* と全く一致しているが、これはパーリ律の註釈の漢訳であるから当然であり、以下にはこれを南伝として扱う。

（1）これには *Udāna 008–007*（p.090）と *Udāna 004–001*（p.034）に記されるナーガサマーラとメーギヤの事績が該当する。

［1］阿難以前の侍者を列挙するアッタカター資料には以下のものがある。挙げられる人名が一致するものを並べて紹介する。『善見律毘婆沙』のものは［1–9］に *Samantapāsādikā* と併記する。

［1–1］*DN.-A.*（vol. II　p.418）：upaṭṭhākaparicchede *ānando* ti nibaddhupaṭṭhākabhāvaṃ sandhāya vuttaṃ. bhagavato hi paṭhamabodhiyaṃ nibaddhā upaṭṭhākā nāhesuṃ. ekadā **nāgasamālo** pattacīvaraṃ gahetvā vicari, ekadā **nāgito**, ekadā **upavāno**, ekadā **sunakkhatto**, ekadā **cundo samaṇuddeso**, ekadā **sāgato**, ekadā **meghiyo**.

〔過去七仏の第一〕侍者を説く箇所において「阿難」とは (1)、彼が〔釈尊の〕定まった侍者であることに関して説かれる。世尊の成道後初期には定まった侍者がいなかった。ある時は**ナーガサマーラ**が鉢と衣を取って遊行した。ある時は**ナーギタ**が、ある時は**ウパヴァーナ**が、ある時は**スナッカッタ**が、ある時は**チュンダ沙彌**が、ある時は**サーガタ**が、ある時は**メーギヤ**が〔鉢と衣を取って遊行した〕。（この後にナーガサマーラとメーギヤの無作法が後に見る *Udāna* の記述にもとづいて物語られ、つづいて阿難が侍者に選出される場面が記述される。）

（1）*DN.014 Mahāpadāna-s.*（vol. II　p.001）において過去七仏の第一侍者（aggupaṭṭhāka）が述べられる中（p.006）で、最後に「今、私には阿難という侍者比丘が第一の侍者である（mayhaṃ ..... etarahi ānando bhikkhu upaṭṭhāko aggupaṭṭhāko）と述べられることを指している。

［1-2］*Apadāna-A.*（p.307）：tena ca samayena bhagavato paṭhamabodhiyaṃ vīsati-vassāni anibaddhā upaṭṭhākā ahesuṃ. ekadā **nāgasamālo** pattacīvaraṃ gahetvā vicarati, ekadā **nāgito**, ekadā **upavāno**, ekadā **sunakkhatto**, ekadā **cundo samaṇuddeso**, ekadā **sāgato**, ekadā **meghiyo**, te yebhuyyena satthu cittaṃ nārādhayiṃsu.

その時、世尊には成道後初期の 20 年間、定まった侍者がいなかった。ある時は**ナーガサマーラ**が鉢と衣をとって遊行した。ある時は**ナーギタ**が、ある時は**ウパヴァーナ**が、ある時は**スナッカッタ**が、ある時は**チュンダ沙彌**が、ある時は**サーガタ**が、ある時は**メーギヤ**が〔鉢と衣を取って遊行した〕。彼らのほとんどは師のお心に適わなかった。（つづいて阿難が侍者に選出される場面が記述される。）

［1-3］*Udāna-A.*（p.217）：*upaṭṭhāko hotī* ti, paricārako hoti. bhagavato hi paṭha-mabodhiyaṃ upaṭṭhākā anibaddhā ahesuṃ. ekadā **nāgasamālo**, ekadā **nāgito**, ekadā **upavāṇo**, ekadā **sunakkhatto**, ekadā **cundo samaṇuddeso**, ekadā **sāgato**, ekadā **meghiyo**. tadā pi **meghiya**-thero va upaṭṭhāko.

「〔メーギヤが〕侍者（upaṭṭhāka）であった」とは、奉仕者（paricāraka）であったの意である。なんとなれば世尊には成道後初期に侍者が定まっておらず、ある時は**ナーガサマーラ**が、ある時は**ナーギタ**が、ある時は**ウパヴァーナ**が、ある時は**スナッカッタ**が、ある時は**チュンダ沙彌**が、ある時は**サーガタ**が、ある時は**メーギヤ**〔が侍者であった〕。その時、メーギヤ長老が侍者であった。

［1-4］*Theragāthā-A.*（vol. Ⅲ　p.111）：tena ca samayena bhagavato paṭhama-bodhiyaṃ vīsativassāni anibaddha-upaṭṭhākā ahesuṃ. ekadā **nāgasamālo** pattacīvaraṃ gahetvā vicarati, ekadā **nāgito**, ekadā **upavāno**, ekadā **sunakkhatto**, ekadā **cundo samaṇuddeso**, ekadā **sāgato**, ekadā **meghiyo.** te yebhuyyena satthu cittaṃ nāradhiṃsu.

その時、世尊には成道後初期の 20 年間、定まった侍者がいなかった。ある時は**ナーガサマーラ**が鉢と衣を取って遊行した。ある時は**ナーギタ**が、ある時は**ウパヴァーナ**が、ある時は**スナッカッタ**が、ある時は**チュンダ沙彌**が、ある時は**サーガタ**が、ある時は**メーギヤ**が〔鉢と衣を取って遊行した〕。彼らのほとんどは師のお心に適わなかった。（つづいて阿難が侍者に選出される場面が記述される。）

［1-5］*Jātaka 456 Juṇha-j.*(vol. Ⅳ　p.095）：*suṇohi mayhaṃ vacanaṃ janindā* ti idaṃ satthā jetavane viharanto ānandattherena laddhavare ārabbha kathesi. paṭhamabodhiyañ hi vīsati vassāni bhagavato anibaddhupaṭṭhākā ahesuṃ. ekadā thero **nāgasamālo**, ekado **nāgito upavāṇo sunakkhatto cundo** (1) **sāgato** (2) ekadā **meghiyo** bhagavantaṃ upaṭṭhahi.

「私の言葉を聞きなさい。国王よ……」と、この〔ジャータカ〕を、師は祇園精舎に滞在されている時に、阿難長老に叶えられた願いに関して説かれた。なんとなれば、成道後初期の 20 年間、世尊には定まった侍者比丘がいなかった。ある時は**ナーガサマーラ**が、ある時は**ナーギタ**が、ある時は**ウパヴァーナ**が、ある時は、**スナッカッタ**が、ある時は**チュンダ**が、ある時は**サーガタ**が、ある時は**メーギヤ**が世尊に仕えた。

（1）底本（PTS）、ビルマ版（Chattha sangayana CD）ともに‘samaṇuddesa’（沙彌）の語を落としている。

（2）底本には‘sāgalo’となっているが、ビルマ版にしたがって訂正する。

［1-6］*AN.-A.*（vol. I　p.292）：tena kho pana samayena bhagavato paṭhama-bodhiyaṃ vīsati vassāni anibaddhā upaṭṭhākā ahesuṃ. ekadā **nāgasamālo** pattacīvaraṃ gahetvā vicarati, ekadā **nāgito**, ekadā **upavāno**, ekadā **sunakkhatto**, ekadā **cundo samaṇuddeso**, ekadā **sāgato**(1), (ekadā **rādho**,)(2) ekadā **meghiyo**.

（阿難が多聞第一であることを述べるために阿難の伝記を記す中に）その時、世尊には成道後初期の20年間、定まった侍者がいなかった。ある時は**ナーガサマーラ**が〔釈尊の〕鉢と衣を取って遊行した。ある時は**ナーギタ**が、ある時は**ウパヴァーナ**が、ある時は**スナッカッタ**が、ある時は**チュンダ沙彌**が、ある時は**サーガタ**が、（ある時は**ラーダ**が、）ある時は**メーギヤ**が〔鉢と衣を取って遊行した〕。（これ以降の記事は［1-1］*DN.-A.*に同じ。）

（1）底本には‘sāgalo’となっているが、ビルマ版にしたがって訂正する。

（2）底本には‘ekadā rādho’を欠くが、ビルマ版によって補う。底本（PTS）の脚注によれば用いられた４写本の中、ビルマ文字の１写本がやはりここに‘ekadā rādho’を挿入している。総人数が南伝では異例の８人となることからも何かの誤りであることは考えられる。しかし北伝の一部の伝承と一致し、そのような情報がどのように入り込むのか、その過程を明らかにできない以上、無視されるべきではないと考え、この異読を重視する。

［1-7］*SN.-A.*（vol. I　p.258）：*upaṭṭhāko hoti* ti paṭhamabodhiyaṃ anibaddh-upaṭṭhākakāle upaṭṭhāko hoti. tasmiṃ kira kāle satthussa asīti mahātheresu upaṭṭhāko abhūtapubbo nāma n’ atthi. **nāgasamālo**, **upavāṇo**, **sunakkhatto**, **cundo samaṇuddeso**, **sāgato**, **bodhi**, **meghiyo** ti ime pana pāliyaṃ āgatupaṭṭhākā.

「〔ウパヴァーナが〕侍者であった」とは、成道後初期に侍者が定まっていなかった時に侍者であったの意である。その時、師の80人の大長老の中に侍者が未だかつていなかったというのではないそうだ。**ナーガサマーラ**、**ウパヴァーナ**、**スナッカッタ**、**チュンダ沙彌**、**サーガタ**、**ボーディ**、**メーギヤ**という、これらの者たちもパーリ聖典に登場する侍者である。

［1-8］*MN.-A.*（vol. II　p.053）：nāgasamālo ti tassa therassa nāmaṃ. paṭhama-bodhiyaṃ hi vīsativassabbhantare **upavāna-nāgita-meghiyatherā** viya ayam pi bhagavato upaṭṭhāko ahosi.

「ナーガサマーラ」とはその長老の名前である。成道後初期の20年間においては**ウパヴァーナ長老**、**ナーギタ長老**、**メーギヤ長老**らのように、この長老も世尊の侍者であった。

［1-9］*Samantapāsādikā*（vol. I　p.178）：kim pan’ ānandatthero tadā upaṭṭhāko hotī ti. no ca kho nibaddha-upaṭṭhākaṭṭhānaṃ laddho. bhagavato hi paṭhamabodhiyaṃ vīsativassantare nibaddhupaṭṭhāko nāma n’ atthi. kadāci **nāgasamālatthero** bhagavantaṃ upaṭṭhāsi, kadāci **nāgitatthero**, kadāci **meghiyatthero**, kadāci **upavānatthero**, kadāci **sāgatatthero**, kadāci **sunakkhatto licchaviputto**, te attano ruciyā upaṭṭhahitvā yadā icchanti tadā pakkamanti. ānandatthero tesu upaṭṭhahantesu appossukko hoti, pakkantesu sayam eva vattapaṭivattaṃ karoti, bhagavā pi ca kiñcāpi me ñātiseṭṭho upaṭṭhākaṭṭhānaṃ na tāva labhati, atha kho evarūpesu ṭhānesu ayam eva patirūpo ti adhivāseti. tena vuttaṃ *āyasmā ānando patthapulakaṃ silāyaṃ piṃsitvā bhagavato upanāmeti taṃ bhagavā paribhuñjatī* ti.

阿難長老はその時 (1) 、侍者であったか？侍者であった。しかしまだ定まった侍者の地位を得てはいなかった (2) 。なぜなら世尊には成道後初期の 20 年間、定まった侍者がいなかった。ある時は**ナーガサマーラ**が世尊に仕えた。ある時は**ナーギタ**が、ある時は**メーギヤ**が、ある時は**ウパヴァーナ**が、ある時は**サーガタ**が、ある時は**リッチャヴィ子・スナッカッタ**が〔世尊に仕えた〕。彼らは自身の気が向いた時に仕えて、望む時に去った。阿難長老はそれらの者たちが仕えている間はあまり熱心ではなく、彼らが去った時には自らが種々の務めを為した。世尊も「私の一番の親類（阿難）はまだ侍者の地位を得ていないけれども、このような状況においてはこの者（阿難）だけが相応しい」と〔阿難の奉仕を〕忍受された。これについて「阿難長老は１パッタの麦菓子を石で挽いて世尊に近づいた。世尊はそれを食された」と言われる。

『善見律毘婆沙』（大正 24　p.706 中）：問曰。是時大徳阿難侍佛不。答曰侍。如來從菩提樹下起、二十年中侍佛者皆不專一。或時大徳**那伽**（Nāga）。或大徳**那耆多**（Nāgita）。或大徳**彌耆耶**（Meghiya）。或大徳**優伽婆**（Upavāna）。或大徳**沙伽多**（Sāgata）。或大徳**須那訶多**（Sunakkhatta）。如是諸大徳隨意樂侍。而來不樂而去或悉去。時大徳阿難來侍。

(1) ヴェーランジャーの飢饉に際して釈尊が馬麦を食された時を指す。

(2) このような議論が為される背景には、明らかに雨安居地伝承が念頭にあろう。アッタカターの雨安居地伝承ではヴェーランジャーの雨安居が成道後第 12 年に当るため、この時はまだ阿難が侍者になっていてはならないのである。

［2］阿難以外の侍者を挙げる漢訳資料とは以下のものである。

［2-1］『処処経』（大正 17　p.526 上）：佛言。本侍佛者、字**彌喜**（Meghiya）、次字**須那察多**（Sunakṣatra）、次字阿難。佛告諸比丘。我年老欲得一人侍我。

［2-2］『毘尼母経』（大正 24　p.827 下）：爾時有八人在邊捉拂拂佛。一者**迦葉**、二者**優陀夷**、三者**莎伽陀**（Sāgata）、四者**彌卑喩**（Meghiya）、五者**那迦婆羅**（Nāgapāla）、六者**均陀**（Cunda）、七者**修那刹邏**（Sunakṣatra）、八者阿難。如此等比丘所捉拂拂佛。名之爲拂。

［2-3］『大智度論』（大正 25　p.252 下）：侍者**羅陀**（Rādha）、**彌喜迦**（Meghika）、**須那刹羅多** (1) （Sunakṣatra）、**那伽娑婆羅**（Nāgapāla？）、阿難等。常侍從世尊執持應器 (2) 。

［2-4］『　同　』（大正 25　p.303 中）：得道時、**彌喜**（Meghika）、**羅陀**（Rādha）、**須那刹多羅**（Sunakṣatra）、阿難、**密跡力士**（Vajrapāṇi）等、是名内眷屬 (3) 。

(1) 底本は「須那利羅多」。宋・元・明・宮内省図書寮本に従い「利」を「刹」と訂正する。しかし原語から考えて次に挙がる「須那刹多羅」が正しい。

(2) Étienne Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāśāstra)*, Tome Ⅲ, Louvain, 1970, p.1675 参照。ただし「那伽娑婆羅」の原語に‘Nāgasamāla’をあてている。

(3) Étienne Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāśāstra)*, Tome Ⅴ, Louvain-la-Neuve, 1980, p.2236 参照。ただし「彌喜」の原語に（Meghiya）を、「密跡力士」の原語に‘Guhyaka Malla’をあてている。

［3］侍者の名前の出入りを表で示せば次ページのようになる。①～⑧の数字は資料に挙げられる際の順番を示している。

［3-1］表

	Nagasam.	Nāgita	Upav.	Sunakkhatta	Cunda 沙弥	Sāgata	Bodhi	Rādha	Meghiya	迦葉	優陀夷	密跡力士
DN.-A.	①	②	③	④	⑤	⑥			⑦			
Apad.-A.	①	②	③	④	⑤	⑥			⑦			
Ud.-A.	①	②	③	④	⑤	⑥			⑦			
Therag.-A.	①	②	③	④	⑤	⑥			⑦			
Jātaka 456	①	②	③	④	⑤ Cunda	⑥			⑦			
AN.-A.	①	②	③	④	⑤	⑥		(⑦)	⑧			
SN.-A.	①		②	③	④	⑤	⑥		⑦			
MN.-A.	○ (1)	②	①						③			
Samantap.	①	②	④	⑥		⑤			③			
善見律 毘婆沙	① 那伽	② 那耆多	④ 優伽婆	⑥ 須那訶多		⑤ 沙伽多			③ 弥耆耶			
処処経				② 須那察多					① 弥喜			
毘尼母	⑤ 那迦婆羅			⑦ 修那利邏	⑥ 均陀	③ 莎伽陀			④ 彌卑喩	① 迦葉	② 優陀夷	
智度論 (p.252 下)	④ 那伽娑婆羅			③ 須那利羅多				① 羅陀	② 弥喜迦			
智度論 (p.303 中)				③ 須那利多羅				② 羅陀	① 弥喜			⑤ 密跡力士

(1) *MN.-A.*の記事はナーガサマーラが他の３人と同様に侍者であったとするのみであるため、ナーガサマーラについて順番を示すことは適当ではない。

［3-2］先の表から分かることは以下のことである。

DN.-A.、*Apadāna-A.*、*Udāna-A.*、*Theragāthā-A.*の伝承は完全に一致する。*Jātaka 456*のものもこれに近いが、Cunda について肩書きの「沙彌」を欠くことに違いが見られる。

AN.-A.（ただしビルマ版）のものは *DN.-A.*などのものに Rādha を加えることで総数が 8 人になる。*SN.-A.*は Nāgita を欠くかわりに Bodhi が入るが、総数は *DN.-A.*などと同様に 7 人である。

*MN.-A.*のものは全員をリストアップしようとする意図を欠いているものと思われる。

Samantapāsādikā と『善見律毘婆沙』のものは *DN.-A.*などと比較した場合、Cunda 沙彌を落として総勢が 6 人となっているだけではなく、挙げられる順番も著しく異なっており、系統を異にするものと考えられる。

なお上記のうち、『善見律毘婆沙』を含めたパーリのアッタカターは、彼らが阿難が侍者になる以前の侍者であって、釈尊の後半生の 25 年間は阿難一人が侍者を務めたことを意図していることが明らかな記述である。しかし漢訳資料では、『処処経』を除いては、『毘尼母経』も『大智度論』もそのような意図を明確には示していない (1) 。しかしながら以下の調査では、これらの漢訳資料も彼らを阿難以前の侍者とするものとして進める。

北伝のものはいずれも名前を挙げる順番がアッタカターのものと著しく異なり、また互いに一致が見られない。ただし『毘尼母経』のものは上の［2-2］で見たように阿難を加えて総勢を「有八人在邊捉拂拂佛」と明記しており、「迦葉」、「優陀夷」という他には挙がらない人名を含むとはいえ、阿難を除く侍者の総勢が 7 人であったとの見解を示しており、これはアッタカターのものと何らかの関連を有しているかもしれない。

（1）『大智度論』のものは決して明確ではないが、「阿難」の後に「密跡力士」を加えることに時系列を意識していることが伺えるかもしれない。後に紹介する『根本有部律薬事』中のヴァジュラパーニが侍者になる記事は、釈尊の最晩年のこととされ、釈尊が侍者である阿難を連れていくことができない地へヴァジュラパーニを伴ったとするからである。